

—第6編— 隠蔽されたまちなみ ② ダマスカスの旧市街地にて②

きなくさい内戦の狭間のペイルートから、時代物のベントのタクシーに乗り合って山地を越え、真夏のダマスカス^{*1}に入った。遠く周りを囲むカラカラに乾いた斜面には、都市の経済と生産を支える蜃気楼のようなスラムが浮かぶ。その盆地の中央に、気の遠くなるような歴史の断片が重層する旧市街地がある。その網の目のようなスーク（市場）は新鮮な血を運ぶ動脈だ。人いきれと埃と香辛料にむせ返るその通り沿いに、極彩色の商品で溢れる店、喧噪の家内工場、安らぎのカフェ、静寂のモスク等々が臓器のように連なり、折り重なる。

錆び付いたトタンの天蓋アーケードに開いた無数の孔から、幾筋もの光が地上に届き、見上げれば真昼の銀河のよう（写真06-1）。そのまちなみは、予定調和のそれとは正反対の様相を呈していた。人々の生々しい欲望と生の営みのすぎましい密度とエネルギーが、折り目正しい時間の進行を凌駕しながら聖なる領域と背中合わせで渦巻く。そして、その俗と聖のすべてが、旅人にとってめくるめくような怪しい空間に充滿しているように見える。



写真06-1 ダマスカスのスーク

*1
Damascus: シリア
の首都(都市圏人口約
100万人)

気がつくと、徘徊することに心地良く疲れた私はある建物の一角に佇んでいた。かつての都市邸宅に違いない。正八角形の泉を中心にして、アーチとコロネード^{*2}（回廊）に囲まれた幾何学模様のアトリウムは、天空からの四角い陽光に彩られて、到底これ以上望むべくもない心地よさと瑞々しさを満たされていた。そして、高度に様式化されたこの空間では、光、色、水、素材、構造、プロポーション、装飾、植栽、それらのすべてが予定調和の極地にあった（写真06-2）。

何世紀も前に意図されたその世界がまちなみに隠蔽され、そこに触れた者だけが酔いしれることができる。彷徨い込んだ私は、しばらく立ち去ることができなかつた。石と土でできた建築は、そんな時を超えた特権的な密やかな楽しみを、まちのそこかしこに刻み込むことを許したのだ。

一方、1970年代半ばのその頃、旧市街地の周辺は整然としたグリッド状の街路網による大規模な区画整理が着々と進んでいた。カオスと豊穡の旧市街地、どこにでもある近代都市計画の周辺市街地、そしてその外側の斜面地に貼り付き自己増殖するスラム。かつて巧妙に時を刻み、そこに隠蔽されたまちなみは、経済の急速な拡大と共に凡庸に外部化され、その奥深い魅力と癒しの風情を失っていく。さらに、近年の激しい内戦は無用な憎しみと破壊を増幅する。現実の結末を超えて、このまちなみはどのよう



写真06-2 かつての都市邸宅のアトリウム

*2
Colonnade: 列柱が連
なる柱廊